

中国西北における中国支配と中国文化

— 河西地方の場合 —

藤 田 高 夫

Chinese Culture and Governance in Northwest Frontier

FUJITA Takao

This article analyzes the process of Chinese governance over northwest frontier of China in the Han period and examines its possibility of political independence from the China proper. In the Qin period, the northwest frontier was not considered as a region to be conquered, but the result of battle between the Han and the Xiongnu obliged the Han dynasty to inaugurate a direct government over the newly conquered frontier. At the beginning of the 1st Century, the political leaders of this region chose the way to rejoining to the Han dynasty, although they could have maintained a political independence from the Han dynasty. The leaders knew that the Chinese frontier could be sustained only by the support of the China proper, and their choice determined the pattern of Chinese culture in this region in the later times.

キーワード：中国西北、河西、中国支配、中国文化、竇融

1. 序言

本稿でいう中国西北とは、現在の中華人民共和国における甘粛省および内モンゴル自治区西部を指している。一般に内陸アジアの範囲は、これをはるかに超え、「中央ユーラシア」の言葉が示すように、モンゴル高原からカスピ海・黒海までの草原地帯や、新疆ウイグル自治区のようなオアシス地帯、チベット高原や西部シベリアを含む広大な空間を意味するが、本稿は、当該地域における「中国文化」の位相を探ることを目的としており、中国との関わりが明瞭に検出できる地域として、上記の中国西北を設定する。

ここでいう明瞭な中国との関わりとは、過去における中国支配の存在を意味している。当該地域は、中華人民共和国の版図であるが、周知のとおりそこに至る経緯は直線的なものではない。東から漸進的に中国支配が浸透し現在の版図を現出したのではなく、拡大と縮小を繰り返しながら現在の姿を示すに至っている。

この地域は、基本的には中国の政治的支配を受けなかった日本や朝鮮半島、中国支配を脱してのちは自立を保ったベトナム北部、逆に中国支配に組み込まれて以後一貫してその支配が続いている台湾などと比較した場合、中国支配の「断続」が特徴として浮かび上がる。また政治的支配の濃淡も、時代と地域によって差が大きい。

こうした中国西北の特殊性は、当該地域における中国文化へのスタンス、あるいは受容の様相に何らかの意味を持つのではなかろうか。それが本稿の問題設定である。

2. 漢進出以前の河西

中国が政治的統一体としての実体を持ったのは、前221年の秦による統一を待たねばならない。近年の日本における戦国・秦史研究は、統一以前の中国の多様性、および「統一」の現実性を検証する方向で推移しているように思われる¹⁾。それにともなって、始皇帝による長城建設の意義が再検討の俎上に乗ってきた。常識的な理解である北方民族への軍事的対応が、おそらくは為政者自身の直接の目的であったことは否めないが、それとは別に、築かれた長城が北辺における「限界」の設定という意味を持ったとも考えられるのである。対照的に長城の築かれなかった「百越」と総称される南方に対しては、征服のための軍事行動を繰り返している。

秦長城の西端は漢の臨洮県付近とされており、その地は現在の甘粛省の東南端に位置し、北流黄河を横断して、いわゆるオルドスを長城内に取り込むことは意図されていた。換言すれば、取り込まれなかった地域、すなわち長城の外部に対しては、無関心であったと思われる。

この長城にかりうじて取り込まれた現在の蘭州市から西北に連なるのが、河西の地、いわゆる河西回廊である。蘭州西北の分水嶺である烏鞘嶺を超えると、河川はすべて内陸河川となる。この地には仰韶文化の流れをくむ彩陶文化の諸類型が存在し、河西回廊西部には四壩文化、沙井文化などの新石器文化の類型が確認されている²⁾。そこでは類型が新しくなるほど、牧畜の比重が増すといわれ、祁連山脈を超えた湟水流域においても同様の現象が指摘されている。これらの新石器文化との関連は不明であるが、この地は遊牧民月氏の勢力範囲であった。その月氏を前3世紀末、冒頓単于が西方に「駆逐」し、河西は匈奴の勢力下におかれる。西方に追われた月氏については、周知の通り、イリ流域に移動した小月氏、アムダリアに移動した大月氏と、その後の動静が知られているが、その故地である河西に月氏を構成していた勢力が残存していたのかは分からない。また、ほぼ80年におよぶ匈奴支配の実態を探る手がかりも、現在のところ得られていない。ただ、もともと牧畜の優越する農耕文化をはぐくんだこの地は、匈奴の牧地としても有効なものであったのだろう。

1) たとえば、『岩波講座 世界歴史3—中華の形成と東方世界—』（1998年）。

2) 李水城「沙井文化研究」（『国学研究』2、1994年）。

3. 漢の対匈奴戦争と河西進出

この地が漢の支配下に入るのは、前漢武帝時代の匈奴との戦争の結果である。ただし、ここで誤ってならないのは、対匈奴戦争の戦略は、匈奴の領域を奪うことではなく、その中核的軍事力の破碎を第一として展開したことである。河西の地に漢の遠征軍が侵入するのは、匈奴の右翼に打撃を与えることが目的だったのであり、河西を征服することをめざしたわけではなかった。前121年、前漢の驃騎將軍霍去病の遠征は、軍事的には大成功を収め、河西の地を統括していた渾邪王が部民を率いて投降し、匈奴の右翼は大きく後退した。

この勝利は、一方で漢に困難な課題を押しつけることにもなった。そもそも支配領域の拡大を意図して行われた軍事行動でなかったために、河西の地の戦後処理は想定されていなかったからである。漢はここを匈奴とは別種の遊牧民烏孫にゆだねることを考え、張騫を派遣する（前115年帰国）。しかし烏孫誘致は失敗に終わり、漢はここを直接統治せざるを得なくなった。河西四郡の設置である³⁾。

要するに、漢の河西支配の開始は、対匈奴戦争遂行のためのやむを得ぬ選択だったのであり、辺境開拓という意図が存在していたわけではなかったし、ましてやいわゆる「シルクロード」の交易の利を得るといった経済的背景は見いだしがたいのである。したがって、漢の河西支配は、軍事拠点の建設と、それを維持する軍政システムの構築として遂行されることになる。それが長城の西への延伸（エリアとしての囲い込み）と司令部たる都尉府の管轄する哨戒ラインの形成、そして駐留する国境部隊を支える屯田の開始である。

同時に徙民も行われたようで、屯田は次第に民間による農耕に移行していった。灌漑施設の建設が不可欠なこの地での穀物栽培が容易でなかったことは、「宜禾」「效穀」などの穀物に関する嘉名が地名として現れることから想像できるが、もともと新石器文化をはぐくむ環境はあったのであり、河川の水量も現在よりはるかに豊かであったことが想定されており、食料生産は駐留する部隊と流入する人口を支えることが可能なレベルに上昇していたといえる。『漢書』地理志には、前漢末の河西四郡の状況を次のように伝える。

武威郡 戸万七千五百八十一、口七万六千四百一十九、県十。

張掖郡 戸二万四千三百五十二、口八万八千七百三十一、県十。

酒泉郡 戸万八千一百三十七、口七万六千七百二十六、県九。

敦煌郡 戸万一千二百、口三万八千三百三十五、県六。

4. 竇融政権—自立しない河西

王莽の末年から後漢の初期にかけて、河西地方は大きな転機を迎える。中原での政治混乱に対して、この地に張掖属国都尉（異民族居住区および異民族部隊の長官）として赴任していた竇融が、行河西五

3) 河西四郡の設置年代は、『史記』・『漢書』の紀年の矛盾から確定しがたいが、張騫の帰国した前115年以降とする日比野丈夫説が最も妥当であろう。日比野丈夫「河西四郡の成立について」（同『中国歴史地理研究』、同朋舎、1977年）。

郡大將軍（敦煌・酒泉・張掖・武威・金城）を名乗り、五郡の郡太守連合の上に君臨する政權を樹立したのである。この地の軍事行政の一次史料である居延漢簡に見える文書類は、王莽期からこの竇融時代のものが過半を占めている。そこからは、中原王朝との連絡を絶たれた河西地方の実情がかいま見える⁴⁾。

前漢文帝の外戚を祖先にもち、王莽時代には軍事的功績を挙げていた竇融が河西の地にやってきたのは、「天下の安危いまだ知るべからず。河西は殷富、河を帯びて固と為し、張掖属国は精兵万騎、一旦緩急あれば、河津を杜絶して、以て自守するに足る。此れ遺種の処なり」（『後漢書』竇融伝）と自ら述べたように、王莽敗滅後に仕えた更始政權の先行きを危ぶんだからである。鉅鹿太守への推薦を辞退し張掖属国都尉となることを願い出て赴任するとまもなく、長安の更始政權が崩壊する。竇融は、赴任後よしみを通じていた河西五郡の太守・都尉らと次のように語った。「今、天下擾乱し、いまだ帰するところを知らず。河西は斗絶して羌胡の中に在り。心を同じくし力を戮さざれば、則ち自守する能わず。権鈞しく力齊しければ、復た以て相い率いる無し。当に一人を推して大將軍と為し、共に五郡を全うし、時の変動を観るべし」（『後漢書』同前）。衆議の結果、竇融を行河西五郡大將軍事とし、彼を推した人びとがそれぞれ五郡の太守の地位に就く。

そもそも竇融がトップに立ったのは、彼の祖先が代々河西の地方官として赴任していたこともあるが、なにより属国都尉として彼が率いた軍事力が背景にあったと思われる。竇融治下の河西の状況を、『後漢書』は以下のように記す。「（竇）融、属国に居り、都尉の職を領すること故の如し。従事を置き五郡を監察す。河西の民俗質樸、而して融らの政もまた寛和なり。上下相い親しみ、晏然として富殖す。兵馬を修め、戦射を習い、烽燧の警を明らかにし、羌胡塞を犯せば、融輒ち自ら将いて諸郡と相い救うこと、皆な符要の如く、毎に輒ち之を破る。その後、匈奴懲弑し、復た侵寇すること稀なり。而して保塞の羌胡、皆な震服親附し、安定・北地・上郡の流人の凶飢を避くる者、之に帰して絶えず」。このように、属国の兵力と五郡の軍事力を有効に駆使して、河西の秩序維持には成功している。北方の匈奴の脅威とならんで顕在化した南方からの羌族の侵入も、阻止できたようである。

しかしながら、同時期の居延漢簡からは、この地の統治機構を維持するための人的・物的資源の限界も見いだすことができる。穀物価格の上昇がさほどでもないのは、この地の食料生産力の安定をうかがわせるが、半銭半穀で支給される官吏の俸給は、すべて穀物に切り替えられ、各地の軍事行政機関にも欠員や兼任が頻出するようになる⁵⁾。この状況は、河西の安定のためには、外部からの恒常的補給が不可欠であったことを示している。竇融は、後漢王朝成立後まもなく、洛陽に使者を派遣して後漢の光武帝政權への帰順を表明し、紀元後32年、中原と河西の間に存在した隗囂政權が崩壊すると、自ら洛陽に赴き、河西は後漢王朝の支配下に入ることになる⁶⁾。

4) 鶴飼昌男「建武初期の河西地域の政治動向：『後漢書』竇融伝補遺」（『古代文化』48-12、1996年）参照。

5) 居延漢簡 E. P. F. 22: 70-79は、竇融が建武三年に「領河西五郡大將軍張掖属国都尉」の名で発した穀物だて俸給への改定令である。

6) 奇妙なことに、竇融の後漢政權への帰順以後、居延地方からの木簡の出土は激減する。これは、大幅な軍事機構の改編が行われたことを示唆しているだろう。

漢代の河西地方はフロンティアであった⁷⁾。それゆえに、その維持のためにはつねに中央からの資源補給が必要とされ、自立の可能性は皆無ではないものの、見込みある選択肢ではなかったのである。河西は人工的に生み出された漢人社会であった。軍事上の要請から持ち込まれた統治システムが卓越する地域であり、この地が中国文化一色に塗りつぶされていくのはその意味では当然のことであった。

5. 河西の非漢人

むろん漢人以外の民族が居住していなかったわけではない。竇融の基盤となった張掖属国は、非漢人によって構成されていた地区である。属国の民は、「属国胡騎」と呼ばれる異民族部隊として漢の軍事機構に組み込まれていた。彼ら非漢人がどのような経緯で属国に編成されたのかを具体的に示す資料はほとんどないのだが、居延漢簡から一例だけ示そう。

建武六年七月戊戌朔乙卯

府書曰、属国秦胡盧水土民、従従兵起以来來□ (E. P. F 22: 42)⁸⁾

(大意：建武六年七月戊戌朔乙卯、(居延都尉府より甲渠候官に通達。大將軍幕府の) 書に次のように言う。属国の秦胡、盧水土民は、兵乱が起こってより以来、…)

匿之、明告吏民、諸作使秦胡盧水土民畜牧田作不遣、有無四時言●謹案部吏毋作使

屬國秦胡盧水土民者。敢言之。 (E. P. F 22: 43)

(大意：…これを隠匿している。吏民にはっきりと告げる。およそ秦胡や盧水土民を畜牧田作に作使して、(本務に) 従事させないものは、四半期ごとにその有無を報告せよ。●謹んで配下の吏を調査いたしましたところ、属国の秦胡や盧水の土民を作使した者はありませんでした。以上、申し上げます。)

これからうかがえるのは、属国の民が一般の漢人によって作使されることを防ごうとする姿勢である。騎馬民族が漢人の農耕社会と深く接触し、その結果、次第に隷属的地位に置かれてしまう現象は、西晋末の匈奴の反乱の背景にも見られることである。漢人との接触を根絶することなど不可能であるが、ここではそれを極力避けることで本来の「胡騎」としての戦闘力を保持しようとしているのである。

「盧水の土民」は不詳であるが、属国の民が「秦胡」と呼ばれることには、さらに考えておかねばならない問題がある。「胡」が異民族であることは言うまでもないが、「秦」とは何を意味するのであろうか。「秦」を冠する漢代の語に「秦人」がある。『漢書』匈奴伝に「衛律、単于の為に謀る。井を穿ち城を築き、楼を治めて以て穀を蔵し、秦人を以て之を守らば、漢兵至るとも、我を奈何ともするなし、と」とあり、顔師古は「秦の時、人の亡れて匈奴に入る者あり、今その子孫、尚お秦人と号す」と注してい

7) 一般書であるが、初山明『漢帝国と辺境社会—長城の風景』(中公新書、1999年)は、漢代の河西の状況を居延漢簡を利用しながら、生き生きと描いている。

8) この簡は途中で断裂している。

る。秦人は匈奴ではなく漢人である。しかしそれが「漢兵」と対照させて使われているのは、漢民族であっても、匈奴のもとで暮らしている者は「漢」とは認識されないということの意味している。ならば、属国の胡騎は異民族部隊であるが、その中には「漢」と認識されない漢人が含まれていることになる。彼らは（本当に秦の時代からかどくはさておき）、異民族の中に身を置いていた漢民族であるが、一般の郡県の漢人とは区別されているのである。つまり、ここでの「漢」とは、民族出自を意味するのではなく、きわめて政治的な意味を込めた言葉となる。

属国は、河西においては張掖郡にのみおかれ、その意味では特殊事例である。しかし、そこに存在する「非漢人」たる漢民族は、人工的に作られた河西の漢人社会の「漢人」の意味を逆照射するであろう。前漢王朝の河西進出から一世紀を経て、「漢」たることをアイデンティティとする集団が現地では形成され、そのエリートたちが「漢」（竇融時代の場合は、後漢の光武帝政権）との結びつきを希求したことが、竇融政権の選択だったといえるのだろう。

6. 小結—その後の河西

その後も河西は、その地勢上の特徴から、中原の中国王朝との連絡が隔絶することが幾たびか起こった。五胡時代には、河西に「五涼」と総称される政権が誕生する。このうち前涼政権は、現実に通行関係を持つことが不可能であるにもかかわらず、東晋の正朔を奉じつづける。敦煌は、8世紀に吐蕃の侵攻によって一時その支配下に入るが、唐末・五代・北宋期には帰義軍節度使が敦煌を支配し、一時的中絶を除いて西夏による併呑まで存続する。明代の長城は嘉峪関でおわり、河西全体が中原の政治勢力に組み込まれるのは、清朝を待たねばならない。このように、中国の政治勢力は、波動のように河西に押し寄せては引きあげることを繰り返している。

河西地方を通観すると、文化的には中国文化圏の西端という印象が否めない。それも色の薄まった周縁ではなく、濃厚な中国文化圏の一部という外貌を有する。現実には政治的に中国王朝の支配を脱する、あるいは隔絶されることがあっても、中国文化からの離脱はなかったといってよい。それは、漢人の卓越する社会という側面のしからしむるところではあるが、同時にその漢人社会が、竇融の時代から、外部のより大きな漢人社会からのサポートを必要とするフロンティアであったこと、フロンティアであるがゆえの中原志向と無縁ではなからう。

次に考察すべき問題は、中国の政治勢力の波が引いたとき、この地域で何が起こったのか、ということである。引いた波が再び河西に押し寄せるとき、河西はかつてと同じ文化的外貌を有したまま、新たな波をかぶるのであろうか。鍵となるのは、河西が「自立」ではなく、非中国勢力による支配を受けた時代に、河西に何が起こったかを検出することであろう。非中国勢力支配期の文字資料がきわめて限定されている現状では、西夏時代およびモンゴル時代の河西研究が不可欠となる。さらに、中国勢力の波がどこまで及ぶのか、どれほどの意味を持つのかは、河西のさらに西、すなわち東トルキスタンのオアシス国家の状況を検討する必要があるが生じてくる。いずれも爾後の課題としたい。